アニオド神話



此の物語はフィクションです

アーケード神話

文：幻流斎
絵：門左衛門





八風（やかぜ） イトリ

四条の従姉妹にして
どんなゲームも器用にこなす
ハードゲーマー
容姿とは対照的に
死体蹴りから勝ち挑発まで完備



四条（しじょう） 忠太（ちゅうた）



叔父、吉蔵が経営する
ゲームセンター『エノマキ』で
手伝う高校一年生
ゲームの腕は二流だが、
知識だけはピカイチ！



淀川京（よどがわみやこ）

好きなものは忠太
嫌いなのは、恋路を邪魔する存在
思ったことを口にする一直線乙女
突然忠太の従姉妹として現れた
イトリに乙女センサーが
一抹の不安を感じている

アイドネ





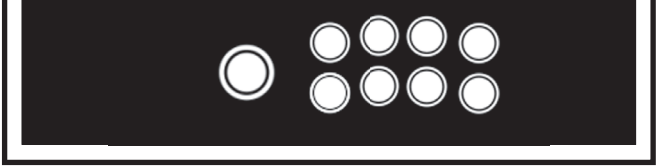
金木博
バンドマンにして
エノマキの店員

◆

八風吉蔵
エノマキの店長

ノーミソふよふよ食事会

Credit 02



「――てよ！」

「ふああ～……」

聞き馴れた声が四条の耳朶を打つ。欠伸をすると開きかかった瞼がまた眠気で重くなる。もう一回寝たい。まだ頭が半分眠りの中だ。

「起きてよ！　机出せないじゃん！」

聞き馴れた声は幼馴染、淀川京（みやこ）のものだった。喧（やかま）しい声が再び眠りに落ちそうな俺の意識の中に割り込んでくる。ついでに背中を足蹴される。

「んん」

寝覚めの良いほうではない俺もここまでされたらさすがに眠ってられない。ダンボールの上なんかで寝たもんだから体中が軋んだような音を鳴らす。

「大丈夫ですか？」

「のわ！」

目を開いて最初に飛び込んできた従姉妹の顔に俺は思わず飛び起きる。垂れた目が印象的な従姉妹、八風（やかぜ）イトリは不思議そうに目をぱちくりさせて俺を見た。桜色の長い後ろ髪の感触が微かに俺の頬に残る。

俺は息を落ち着けるように深呼吸してから先日会ったばかりの従姉妹を見て、ぐっと身体を起こすと、俺の寝ていた場所に京がすかさず壁に立てかけてある卓を置く。

「今日はよろしくお願いします」

「？」

ぺこりと頭を下げたイトリの言葉に俺は一瞬なんのことかわからなかった。

「……開店準備だっけ？」

思い出したような俺の言葉にイトリはもう一度頭を頷かせてみせ

た。

「そのためにわざわざ泊まったんでしょ！」

完全に目的を忘れてた四条に呆れた京は卓の上に大き目の鍋とを三人分の皿を並べる。

「またカレーか」

「しかたないじゃん。余ったんだから」

鍋の中身は先日のカレーだ。

「二日目のカレーは美味しいって聞きますよ」

「そんじゃ飯食ってさっさと開店清掃始めちまうか」

「いただきます」
「いただきます」
手を合わせて呟くようなイトリの声に続くように俺と京が反芻する。
「……美味しいな！」
意外や意外に二日目のカレーも悪くはない。
先日初めて顔を合わせた従姉妹のイトリ、そして京とまさか一緒の卓で朝食をとることになるなんて俺はいまだ不思議で、夢の中にいるようだ。

「そんじゃイトリは今日からここで働くからよろしく頼むよ。イトリは何かわからないことがあったら俺か、あいつ……チュータにでも聞け。チュータも親戚なんだから優しくしてやれよ」

「従姉妹……ねえ」

◆

どこか納得が出来ないように四条はイトリに一瞥くれる。まるで似ないその容姿を前に親戚だと言われてもまるで信じることができな

い。

店長であり叔父である吉蔵（きちぞう）のあまりに唐突過ぎる話しに金木も京も話しの切り出し口が分からない表情を浮かべて顔を見合わせてる。

桜色の目立つ前髪の奥に光る少し垂れた目が四条を含めたアルバイトの三人を見比べるようにゆっくりと動く。

にこにこと微笑んでる表情から何を考えてるのかまるでわからない。

「店長！　新しいバイト？」

「ん、ああ。俺の姪だよ」

「へえ、店長の姪っ子か……っつうかムチャクチャ可愛いじゃん！」

常連の一人がイトリを見ると目を開きあからさまに驚く。その声がゲーム音に満たされたエノマキに割り込む。

「なになに？」

その声を皮切りに次々とまるで見世物でも見に来たかのように常連達がイトリの周りに集まってくる。

「ああ～！　鬱陶しい！」

集まってきた客を払いのけるように手を振るって店長は俺達を見た。

「本当は今日の予定だったけど……今日はもう上がれ。後は俺と金木がやるから」

「ええ～……帰らせちゃうのお？　名前なんて言うの？」

常連達から聞こえてくる声を払うように吉蔵は一度だけ耳元で手を振ると険の悪い目つきで睨む。ドレッドヘアの派手な頭に大柄な体格だ。一睨みで常連達の不満そうな声が消える。

「お前らが鬱陶しいからだよ！　あと俺の姪なんだから悪さすんなよ！」

まるで父親のような言葉で凄む店長を前に逆らおうなんて人間は一

人もいない。

周囲の視線を一身に受けるイトリは柔和な笑みを変えることなく店内を眺めてる。

「ほれ、チュータ。さっさと二人とも連れてけ。それから制服忘れんなよ」

「へーい」

突然帰れと言われた俺は、イトリと京の肩を叩いてハンガーにかけられたブレザーを手に取る。

「叔父さんの言うとおり今日は帰るから。京も、ほら」

「わかりました」

これまた丁寧な口調で返事がくる。

「店長また録画対戦会でもやろうよー」

「今、未編集の動画でハードディスク一杯だから無理。今度新しいハードディスク買ってくるからよ」

店を出ようとする常連達が店長と話してる横を通って俺達は厚手の扉を開く。

「あ、そうだ！　チューター！」

「ん？　なに？」

二人をつれて店を出ようとした四条を思い出したような声で吉蔵が呼び止めた。

「イトリの引越し荷物の片付け手伝ってやれ。こっちに引っ越してきたばっかだから荷物が全然片付いてないんだよ」

「い、今から!?」

「そうだよ。今日は早上がりなんだからそれくらい良いだろ」

またも唐突の言葉だ。さすがに表情が渋面に染まる。

「親戚なんだから……というか、女の子が困ってたら助けてやるもんだぞ。ほれ鍵だ」

「ういー」

諦めたように頭を一つ掻いた俺に叔父さんはぽんと鍵を放り投げてくる。あらぬ方向に飛んだその鍵はイトリが受け取った。

「よろしくお願いします」

「こちらこそよろしく」

年上のように物静かでゆったりとした喋り方を前に俺は多少緊張を覚えた。突然の親戚にどう接すれば良いのかまるでわからない。

「まだ少し寒いな」

四月の夜風は肌寒いが、これから暖かくなっていく予感を孕んでい

て心地が良い。自分の肩を抱くようにして四条は言葉を漏らす。

「ほんじゃ早速引越し荷物片付けに行こうか」

「はい」

ゆっくりと頷いたイトリを先導するように俺はエノマキの外に添えつけられたような無骨な金属階段を上がってく。

カンカンと金属を踏み鳴らす音が三人分……三人分？

明らかに多い足音に俺が思わず後ろを振り向くと満面の笑顔の京の顔が視界一杯に入ってくる。

「そう言えば、何でお前が来てんだ？　帰れよ」

「私も行く！」

「いや、行くっつっても、お前は家に帰らなきゃダメだろ？」

「大丈夫。門限までけっこう時間あるし」

京は心配御無用と言葉を続けてピースしてみせる。

「門限って何時だよ？」

「エノマキのアルバイトなら一一時まで。他は七時まで」

「じゃあダメだろ」

どう考えてもここから先はアルバイトの業務じゃない。おまけに七時なんてとっくに回ってる。

「大丈夫だって。それに引越しの片づけなら人手が多い方が良いでしょ。それとも……私がいたら何かマズイ？」

不安と敵意が混濁したような京の視線を前に俺が大きな息を吐いた。たぶんこうなったら俺の言葉じゃ何を言っても帰らない。

二人をよそにイトリが吉蔵から受け取った鍵で扉を開けた。

――ほんとに周囲のことに関心ないんだ

何をするにも淡々としてるイトリに俺はぽつりとそんなことを思った。

「勝手にしろ。そのかわり、門限の一一時前にはきちんと帰れよ。送っ

てってやるから」

「やった！」

直線的に喜びを表現するかのように京は指を一つ鳴らしてみせた。

「仲良いんですね」

イトリの柔らかい、撫ぜるようなその声が俺の耳にすっと入った。

耳がこしょばゆい。

「昔っからの付き合いなんですよ!!」

何がそんなに嬉しいのか京は俺の首に手を回すとはばかり知らない声を出して俺の顔をぐいっと寄せる。無駄に大きくなった胸が目の前

に迫る。

「家が近いってだけだろ」

絡むような京の手から抜けた俺はドアノブを回し、倉庫に用いられるような厚い金属の扉を横に動かす。

ゲームセンターエノマキの二階。倉庫のような扉を開け、入ってすぐの壁際のスイッチを押すと今はもう使われてない筐体の山が三人を迎える。一目して倉庫だとわかる。

左右に敷き詰められた筐体で人二人が並べられるかどうかの道ができている。ぼやっとした灯りで足元と周囲を確認しながら奥へと進ん

でく。

「相変わらず凄い場所だね！」

まるでアスレチックでも見るかのように楽しそうにあげた京の声が薄暗い部屋に反響する。

どれだけの筐体がここに眠ってるか俺も正確な数は把握してない。

「叔父さんがさっさとオークションに出さないから溜まってく一方だな」

筐体によって年々狭くなっていく道はいつかは人一人すらまともに通れなくなるのではないか。そんなことを考えてしまう。

「さてと」

筐体に挟まれた道の奥にもう一つ扉が見える。今度は変哲もないただの白い扉だ。

「ここに来るの久しぶりだな」

そう言った俺の脇を抜けてイトリが二枚目の扉の鍵を開けると記憶の中にある叔父さんの家が目に入ってくる。

「昔は良く二人で遊びに来たよね！」

「まあ、大分昔な気がするな」

京が思い出すように呟くが俺は最後に来たのがいつかあまり正確に

覚えてない。靴を脱いで家へと上がると、居間にどっかりと積み上げられたダンボールが目に入ってくる。思わず指差してその箱を数えてしまう。

「これの片付けを手伝えって事ね」

誰に言うでもなく呟く。

「そんじゃ早速やるか！」

気合を入れるように俺はシャツの袖を捲くって積み上げられたダンボールを上から床に下ろす。

「何だよ。思った以上に軽いじゃんかよ。見掛け倒しだな。よっ」

ダンボールに張られたガムテープを力任せにびりびりと剥いでく。

「あっ」

「ん？」

イトリの呟くような声を耳に俺はダンボールを開く。

「――！」

普段見慣れない女物の淡色の下着と服が俺の視界を埋める。

「なにしてんのおぉ！」

パンと気味の良い音が鳴る。京がそこらへんに転がってた新聞紙を丸めて俺の頭を叩く。顔に熱を感じながら俺は慌ててダンボールを閉

じるとイトリの方を恐る恐る見た。

「いや、その……悪い！　見るつもりがあった訳じゃなくて――」

言い訳すればするほど必死に見え、それがなんだか情けなく、かえって怪しく思えた。

「一応ダンボールに中に入ってるものは書いてありますから」

慌てて謝る俺に対して何事もなかったかのようにイトリは笑みを浮かべたままダンボールの側面を指差す。

「……ほんとだ」

開いたダンボールの側面に丁寧な字で衣類と書かれてる。

「それに大丈夫ですから」

そうは言われてもやはり頭が上がらない。うなだれた四条を他所に京は衣類と書かれたダンボールをひょいと持ち上げる。

「そんじゃ私達はこのダンボールの中身片付けてるから、チュータはそっちのよろしくね。衣類って書かれてるダンボールは開いたらダメだから」

京が念を押すように俺を見ると、抱きかかえたダンボールを奥へと運んでく。居間に一人残された俺は次なるダンボールに狙いを定める。注意深く見た側面には食器と書かれている。

「よっと」

思ってたより少し重いダンボールを床に置きばっと開く。今度は新聞紙で包まれた食器が幾つも入ってる。アニメのキャラクターがプリントされている皿やマグカップ、見覚えのあるゲームのグッズだ。

「やっぱゲーマーなのかな？」

いまだイトリの存在は四条にとって謎なままだ。昼頃からエノマキで対戦していたときも本当に本人か疑わしい。あの大人しそうな外見と、死体蹴りや勝ち挑発を入れてくるプレイスタイルが四条にはどうしても結びつかなかった。

奥の部屋からは京の騒がしい声が聞こえてくる。ときおりその声に混じってイトリの声も聞こえてくる。二人の声をよそに四条は黙々と片付けを始める。

まだ掴めない従姉妹の正体を考えながら俺は叔父さんの食器の横に並べていく。無骨な食器の横にキャラクターのグッズが並ぶのが何だか異様に思える。

「次の取りに来たー！」

元気な声で部屋に入って来た京は次なるダンボールを取っていく。

「まだ一つなの？」

のんびりと食器を片付けてる俺をバカにするような顔で京は嘲笑を浮かべる。

「そっちは二人、こっちは一人なんだからしかたねえだろ」

「はいはい。頑張ってください」

まったくやる気のない励ましを送った京はダンボールを抱えるとまた奥の部屋に行ってしまう。

「こっち終わったぞ」

食器と書かれた二箱のダンボールはあれよあれよと言うまに終わってしまった。次にどれに手を出していいのかわからないまま手持ち無

沙汰で四条は積まれたダンボールを眺める。

奥の部屋からは相変わらず京の騒がしい声だけが聞こえてくる。独り言かと思えるほど京の声しか聞こえてこない。

「本、衣類、雑貨……」

側面に書かれた文字を読み上げていく。よく見ると文字の横に小さな星印が描かれてるが、その印の意味するところは考えてみても四条にはまるでわからない。

「ん？　ゲーム？」

他が黒文字にも関わらずわざわざ赤く書かれてるその三文字が刻ま

れたダンボールに四条は吸い寄せられるように近寄る。

「いかがしましたか？」

「ん？　ああ、いや……」

ダンボールの側面を眺めてた俺の横にイトリがいた。いつの間にいたのか全く気がつかなかった。

「これですか？」

俺の眺めていたものがゲームと書かれたダンボールだとわかるとイトリは確認するように指差す。

「まあ、そうです。何が入ってるのかなっと思って」

俺の言葉にイトリは高く詰まれたダンボールを爪先立ちでとろうと手を伸ばす。絶対に積んだのは叔父さんだ。

「だ、大丈夫か？」

「このくらいなら……どうにか」

普段浮かべてるイトリの笑みが若干の歪みを見せる。不安定なその姿勢に俺は後ろで構えるように立つ。

「きゃっ！」

「あっ！」

言葉と同時に体が動いた。

ダンボールを山からずらした直後、その重さに支えきれなくなったようにイトリの体が後ろに大きく傾いた。

「オモっ！」

イトリの体越しに受け止めたダンボールは中に何が入ってるのかわからないがかなり重い。おまけにイトリが体を預けてる状態だ。

「……あ、ありがとうございます」

「――あ、ああ……その、それよりも早く横に」

照れるような従姉妹の言葉よりも、今の体勢が文句なしにヤバイ。

筋肉、それもふくろはぎが攣ってしまいそうだ。

「ってえ!!」

俺のふくろはぎが限界を叫ぶように痛みが走る。反射的に持っていた荷物を横に投げ捨てた俺は畳まれたダンボールの上に背中から思いっきり倒れる。投げ捨てるように手放したダンボールの中身が派手な音と同時に床に散らかる。

「いってえ！」

「……その」

瞑った目を開くとなぜかイトリの顔が目の前にある。

「――！」

もはや続く言葉がなかった。自分の状況がわかるまでどれだけの時間を要しただろう。一瞬かもしれないし、一分以上だったかもしれない。

イトリがのしかかるような形で俺はダンボールの上に倒れてた。甘い息が顔にかかる。思ったよりずっと軽い体が俺に全身を預けて乗っている。何だか、こう言葉できない変な感じだ。ただはっきりと分かってる事はこの状況はまずい。

さすがのイトリも赤面したまま固まってる。

「何か凄い音が……あーー!!!」

京の喧しい声が空間に割って入る。

「いや、その、それが……」

荷物の散らかった部屋で此の光景だ。そりゃ言い訳なんてできないし、言い訳の言葉が思いつくわけもない。

「なな、な――!!」

もはや金魚のように顔も赤いし、口も酸欠のようにぱくぱくしてる。

「た、助かりました」

固まったイトリも起き上がると少し折れたスカートをぽんぽんと手で叩くようにしてぺこりと頭を下げた。

「この……スケベヤロー！」

丸めた新聞を手に京は格闘ゲームキャラクターも真っ青な動きで俺の頭をはたく。難易度G級の一〇割コンボだ。

「いってえ！」

「成敗！　成敗！　せーばい!!」

どれだけ叩かれただろう。京は鼻息を荒くしてまだ俺を睨んでる。

「私のせいですいません」

不安そうにイトリは俺の顔を見た。俺はそれを他所に床に散らかったダンボールの中身を拾い上げる。そのほとんどは本だ。

「放り投げて悪かった……本なら大丈夫だよな？」

俺が一冊拾い上げる。

「……攻略本（ムック）？」

「はい。ゲームの雑誌です」

出てくるのは読み古されたゲーム雑誌だ。エノマキに置かれているゲーム雑誌よりも古いものだ。今では絶版の本がどっかり出てくる。

抑えられない好奇心から一冊手に取って本を開く。

「なっつかしいなー」

いまや稼動してないレトロゲームの攻略特集に四条は思わず声が出

てしまう。

ところどころに赤ペンで丸と注釈が入ってる。

四条の真似をするように京も一冊手にとって中を覗き込む。全くわからない攻略用語などに一瞬日本語かと疑ってしまう。

散らばった雑誌を拾い上げたイトリは積まれたダンボールへと視線をうつす。

「あとは全部ゲーム関係だけですね」

「えっ？　これ全部ゲームなの!?」

「はい」

「――」

京だけでなく四条までも言葉に詰まる。まだ未開封のダンボールが二人の前に五、六箱は見受けられる。これら全てがゲームだと言うなら、ゲーマーというには十分過ぎる量だ。

「おっ、まだいたのか！」

「あ、叔父さん」

「店長」

吉蔵がのっそりと部屋に入ってくると積まれたダンボールを眺める。

「全然片付いてないな」

呆れたようにその一言を重く呟く。

「とりあえず、そろそろ遅いし京は家に帰りな」

「へっ？　お、俺は？」

叔父は俺の顔を見るなり少し黄ばんだ歯を見せて親指を立てる。

「泊まってけ」

『……え？』

俺と京の声が期せずして重なる。

「明日の早朝お前がイトリに開店準備教えてやることになった」

また急な話だ。

「それにまだダンボールの片付けもありそうだし、一層のこと泊まってけば、まだ手伝えるだろ。弟……お前の親父には伝えてあるから」

突然のことに俺は頭の思考回路が完全に止まってしまう。とりあえず横のイトリはさした驚きも見せずに、開いたダンボールの中身を選別するように取り出している。

「ちょ、ちょっと店長！」

「なんだよ？」

剣幕を浮かべた京が質量を感じさせる胸を突き出して店長と俺の間

に割って入る。

「そんな、男女が一つ屋根の下なんて――！」

言葉にするのも憚(はばか)られるように京は耳まで真赤にして俺とイトリを見る。

「べつに良いじゃねえかよ。親戚同士助け合うもんだろ」

「そうだけど、さっきだって――！」

さっきのことを思い出した京は唸って地団駄を踏んで見せると浮かべた剣幕を今度は俺に向けてくる。

「私も泊まる！」

「ん？」

「へ？」

間抜けな声が俺と叔父さんの両方から漏れた。まるで状況を理解する気のないイトリは、ただ一人離れ小島にいるかのようにのんびりと取り出したムックを眺めてる。

「泊まるたって、着替えとか持ってきてないだろ」

「それはチュータも一緒でしょ？」

「男は良いんだよ」

理不尽極まりない四条の言葉に助けを求めるような目でイトリは店

長の吉蔵を見た。

「良いでしょ、店長？」

「……別に良いけどよ。両親の承諾が取れるならな。ほれ電話しな」

吉蔵はポケットから携帯電話を取り出すと京の前に差し出す。

「今？」

「電話したふりなんてされたらかなわねえから。店の信頼問題にもなるし、ほれ」

「わ、わかった」

京は恐る恐る吉蔵のから携帯電話を受け取るとそれを耳元まで運

ぶ。

「あ、お父さん。私……そう、京。今日吉蔵さんのところに泊まりたいんだけど駄目？　良い！　やった！　それじゃあお母さんに伝えといて！　はい店長。お父さんが話しがあるって」

「あいよ。あ、もしもし電話代わりました。エノマキ店長の吉蔵です」

携帯電話を持って吉蔵は隅の部屋へと入ってしまう。

「はあ」

俺は思わず溜息がもれた。

「あんた達二人だけにさせないんだからね。このスケベ！」

「いや、別に二人になりたかった訳じゃないんだけど」

できれば帰りたかった。

「イトリちゃん。私も今日泊まるから。安心してね！」

そう言えば、いつのまにちゃんづけで呼べるような仲になったのだろうか。

ムックを呼んでたイトリは京の言葉に笑みを浮かべて顔をあげる。

「こちらこそ」

やっとこちらの会話に入ってきたイトリはぱたんと本を閉じると京に向かって頭を下げる。

「そんじゃお前ら、夜の外出は禁止だからな。それから、泊まるならもう少しダンボール片付けとけ。あと晩飯は残りもんのカレー食っとけ。冷蔵庫に鍋が入ってるし、御飯も炊けてるから」

『はーい』

「ほんじゃ俺は下に戻るから、何かあったらそこの電話の一番を押せ。下に繋がるから」

部屋の隅に置かれた一階と二階をつなぐホットラインの黒電話を指差して叔父さんは足早に一階へと行ってしまう。

「明日、開店準備俺が教えるみたいだじゃら……そのー、大丈夫か？

少し朝早いんだけど」

「ご心配なく。朝は割りと強いんで」

細い二の腕を見せてぐっと力を入れてみせるイトリは微笑む。

「むしろ寝起きが悪いのはあんたでしょ」

泊まれることが嬉しいのか満面の笑顔で京が俺の頭を叩いてくる。

「私もいるから、こいつを起こすのは任せてよ！」

京はイトリの手を掴むと力任せに上下へとぶんぶんと振る。

「とりあえずカレーでも食べないか？」

俺は冷蔵庫を勝手に開けると中から少し大きめの鍋を取り出す。中

にはカレーがなみなみと入ってる。

「賛成！」

京の元気一杯の声が部屋に響く。

「ところでさあ……イトリちゃんってゲーム好きなの？」

部屋の隅に置かれた大量のゲーム雑誌を見た京はスプーンを咥えたまま何か躊躇うように一拍置いてからイトリに質問した。俺はカレーを食べていた手が思わず止まる。

「大好きですね」

上下に揺さぶられ乱れた桜色の髪を整えるように頭を撫でながらイトリは返事をしてにこりと笑う。

聞くまでもなかったかのように予想通りの返事だ。これだけのゲームグッズを持ってて嫌いな訳がない。予想してた答えにカレーを食べる。

「やっぱ格ゲーなのか？」

散らかった荷物の中にあったアーケードコントローラーを思い出した俺の質問に、イトリは照れるようにはにかんだ笑みを浮かべる。

「アーケードだったら大体します」

「じゃあ好きなシリーズとかある？」

話題に入れず頬を膨らます京を他所に俺はイトリに質問を続ける。

「んー……」

顎に細く長い指を当ててイトリは天井を仰ぐと、思い出したかのようにスプーンを置いて立ち上がると開いたダンボールの中から何かを取り出す。

「やっぱりこのシリーズが一番好きですね」

持って来たのはとある格闘ゲームのサウンドトラック（サントラ）だ。

「へえ」

懐かしくもメジャーな対戦格闘ゲームのサントラに四条は思わず頷きの声が出てしまった。ゲーム内容は決して簡単なものじゃないし、対戦になればかなり老獪な立ち回りを求められるゲームだ。

「最近の派手なエフェクトの格闘ゲームも好きですけど、私はこういう地味な方が好きですね。全部のキャラクターに特徴ありますし。あとやっぱり音楽が好きだから」

「――わかる！」

俺は腕を組んで大きく頷く。テンションが突然上がった四条のその頷きに京もイトリも目を丸くする。

「それ、俺の思い出のゲームだわ！　俺が子供の頃にさんざん駄菓子屋でやってたから！」

「そうなんですか？　それなら、隠しキャラクターとか知ってますか？」

「知ってる！　知ってる！　キャラセレで――」

「……ねえ」

全く話題に入っていけない京が声をかけるが、二人の会話に阻まれ声が届かない。

「――だから――ですよね」

「そうなんだよ！　わかってるね！」

楽しそうに話す二人を見てたら何だか苛立ちを覚えた京はグーで四条の頭を叩く。

「な、なんだ……よ」

不意に殴られたことに振り向いた四条は、頬をフグのように膨らましてる京を見て思わず言葉を飲み込んでしまう。

「私が全く話しに入ってけないんだけどぉ!!」

四条の頭を京は遠慮なく叩き続ける。

「いてえよ！　悪かったからって頭叩くな！　地味に痛いんだよ！」

「なんでイトリちゃんってそこまでアーケード好きなの？」

不思議そうな京は思ってた言葉がそのまま口に出る。実際女性でアーケードゲームが好きなんてごく僅かだ。それも俺と話し合える人なんて見たことがない。

「両親の仕事の都合で引越しばかりでしたので、気がついたら遊び場がゲームセンターになってたんですよ」

イトリが照れるように笑いながら部屋の隅のムックを見る。

「じゃあ今度もすぐに引っ越しちゃうの？」

「うーん……どうなんでしょう？」

小さく唸ってみせてからイトリは首を傾げる。

「しばらくはこちらでお世話になると両親からも叔父さんからも聞いてるので……」

ぱくりとカレーを一口食べたイトリはにこにこした表情で俺達を見た。

「良かった。せっかく友達になったのにすぐにバイバイじゃ悲しいもんね」

「そうですね」

「引越してきたばっかで分からないことも多いだろうから、エノマキ

のことだけじゃなくても何かあったらいつでも聞いてな！　一応叔父さんにも頼まれてるし」

俺は歯を見せて自身のことを親指でびっと指す。今日一番の笑顔を出したつもりだ。

「なんか……チュータ、イトリちゃんに優しくない？」

京の少しつり上がった眉と大きな瞳が何かを疑うように俺を見てくる。

「そ、そうか？」

なぜかその京の視線を真正面から見ることができない俺はわざとら

しいほど視線をそっぽ向ける。

「……」

しばらくの間黙り込んで京が俺を見る。背中に妙な汗を流れる。

「あー腹一杯」

俺が無理矢理話題を逃げるようなかたちで俺はごろんと横になる。

京の針のような視線が緩くなる。

「腹一杯になると眠くなるな」

「もう寝るの？」

「いや……どうだろう」

「お風呂は？　入りなよ！」

「……どうしよう？」

妙な疲れで一度横になると、まるで起き上がることができない。まるで不思議な魔力でも働いてるかのようだ。呆れたように京がふんと鼻をならす。

「引越しの片付けとかで汗かいてんでしょ」

「お前は俺の母さんか！」

口うるさい京に俺は寝転びながら言葉を返す。呆れたように京はふんと鼻を一つ鳴らす。

「あっそ。好きにすればいいじゃん。私達はあっちの部屋でまだ話してるから」

立ち上がった京は押すようにしてイトリを連れてくと、部屋の前で立ち止まり踵を返して俺を見た。

「入ってこないでよ！」

「は、入るわけないだろ！」

声が意思に関係なく上擦ってしまう。俺を疑うように京はじっと見てくる。

「あんま信用してないから。ちなみに入ってきたら半殺しだから」

俺の言葉に満足できないかのように大きな瞳を細めて笑った京はそのまま扉をばたんと閉じる。冗談には聞こえない笑顔だった。

「おやすみなさい」

扉の向こうからイトリの声が聞こえた。

「ああ……よっと」

てきとうな返事をして横になったまま両手両足を伸ばして俺は瞼をゆっくりと閉じる。軽く考え事でもするつもりだったのに意識は暗闇の中に落ちてしまう。

「ん？」

酷く奇妙な感覚が全身に残るなかで目が覚めた。

「ん～……あいつらが消したのか？」

電気が消えた部屋で俺は見事な大の字で寝てた。

「制服のまんま寝ちまったのか」

ぼやけた視界と思考の中で四条はやっと寝てしまったことに気がつく。

――いま、何時だ？

時間を確認する術もろくにない中で二人がいるはずの部屋を見る

と、寝る前には聞こえてきてた声も聞こえない。耳をすませば一階の騒ぐような声が微かに聞こえる。

「寝ちまったかな？」

誰に言うでもなく呟いた四条はゆっくりと体を起こす。

「おーい……寝てるか」

返事が来ないことで二人が寝ていることを確認した四条は、頭がぼんやりとするなかで着ている制服に鼻を近づける。

「……風呂にでも入るか」

若干かもしれないが、制服の放つに匂いに俺は顔を顰(しか)めて立ち上が

る。

「ととっ！」

床に散らかった荷物に躓くように俺は前のめりになりながら記憶を頼りに壁に手を這わせてゆっくりと歩く。

「ん？」

洗面台のある扉の僅かな隙間から漏れるような光が俺の視界に入ってくる。

「ったくよう、電気点けっぱなしすんなよ」

ぼんやりとした視界のなかで、その光だけがはっきりと見える。

「明日もこの制服着ないといけないのか……」

着替えがないだけに仕方のないことだが、四条は渋面を浮かべながら再度匂いを嗅ぎながら光が漏れてる扉を開く。

「あら」

「ん？」

聞きなれた柔和な声に俺は制服から顔を上げた。洗面台の眩しい光に目を細めた俺の視界に入ってきたのはイトリだ。バスタオルを体に巻いたイトリの垂れた目と俺の視線が交差する。

――夢か？

都合の良い夢に俺は思わず頬を握りながら、張り付くようなバスタオル越しにイトリの白い肌をじっと見る。つねった頬は痛い。夢だったら、久しぶりの良い夢だ。

「どうし……」

鏡を見ていた京が振り向く。必然俺と視線が交差する。言葉が途中でぴたりと止まる。

「――!!!」

状況が理解できないように驚いてた京の顔を火照りとは明らかに違う赤が染めていく。相変わらずのでかい胸を隠そうともせずに俺をみ

たまま震えてる。怒りが京の口を塞ぐ。

背筋が凍りつくような感覚。夢とは思えないリアリティだ。

「ね、寝てたのかと思って……」

俺がどうにか喋った言葉は既に京の耳には届いていない。

「こ……この……」

裸にも関わらず京はぎゅっと拳を握って震える。

――やばい！

本能に近いものが握り拳を握った京を前に警鐘を出してる。

「一度ならず二度までも……このスケベヤロー!!」



ノーモーション（ゼロフレーム）のパンチが俺の頬に思いっきりめり込む。ガードがまるで間に合わない。

夢じゃない。確かな痛みと共に俺は床に思いっきり転がると、京はバンっと激しい音を響かせて扉を閉める。

「さいってえ!!」

扉の向こうから京の怒鳴る声が聞こえてくる。

「いってえ……」

殴られた頬を抑えるようにして俺は来た廊下を戻ると、真っ暗な居間でまた横になる。

目を瞑ると殴られた箇所の痛みが大きくなると同時に、脳に焼きついた二人の裸体が浮かんでくる。

「むふ」

白く細いイトリの肢体と赤みを帯びた京の肢体が浮かんでくると思わず鼻の穴が広がる。

「損はないな、よし！」

納得するように頷いてから俺はガッツポーズを一つして見せて眠りの中に落ちてく。

「――てよ！」

「ふああ～……」

聞き馴れた声が四条の耳朶を打つ。欠伸をすると開きかかった瞼がまた眠気で重くなる。もう一回寝たい。

「起きてよ！　机出せないじゃん！」

聞き馴れた声は幼馴染、京のものだった。喧(やかま)しい声が再び眠りに落ちそうな意識の中に割り込んでくる。ついでに背中を蹴飛ばされる。

◆

先日の恨みがまだ残ってるのか？

「んん」

寝覚めの良いほうではない俺もさすがに眠ってられない。慣れない空間で、おまけにダンボールの上で寝たもんだから体中が軋んだような音を鳴らす。

「大丈夫ですか？」

「のわ！」

目を開いて最初に飛び込んできた従姉妹の顔に俺は思わず飛び起きる。先日の裸体が蘇る。一瞬裸に見えた。垂れた目が印象的な従姉妹、

イトリは不思議そうにそんな俺を見た。桜色の長い後ろ髪の感触が微かに俺の頬に残る。

「……叔父さんは？」

息が落ち着くのを待ってから俺は言葉を吐く。

「叔父さんはまだ寝てますよ」

四条がぐっと身体を起こすと、すかさず京が壁に立てかけてある卓を置く。

全く片付かなかったダンボールを眺めながら俺は溜息を一つもらす。

「今日はよろしくお願いします」

「？」

ぺこりと頭を下げたイトリの言葉に四条は一瞬なんのことかわからなかった。

「……開店準備だっけ？」

思い出したような俺の言葉にイトリはもう一度頭を下げて頷いてみせる。

「そのためにわざわざ泊まったんでしょ！　さっさとご飯食べよう！」

「お、おう……つうかまたカレーか」

卓の上に用意されたのは先日のカレーだ。

「残ったんだからしょうがないじゃん」

「二日目のカレーは美味しいって聞きますよ」

二日続けてカレーだ。一口食べてみると確かに美味い、気がする。

明確な違いはわからない。

「そんじゃ飯食ってさっさと開店清掃始めちまうか」

飯をがっと流し込むように食べ、簡単な後片付けだけすると俺達は靴を履きかえる。

「ほんじゃ叔父さん。開店清掃してくるわ！」

「んご」

いびきとも獣の鳴き声とも判別のつかない声が部屋の中から聞こえてくる。

カン、カンと乾いた音をたてて階段を降りると通勤の社会人達が疎らに目に入ってくる。

「ったく、また散らかしていきやがって！」

エノマキ前に散らかった菓子のゴミを拾い上げながら呟く。閉店後に店前で喋るのは勝手だが菓子のゴミくらい片付けていってほしい。

「鍵はこいつな」

イトリに逐一説明しながら俺は扉の鍵を開けてエノマキへと入る。誰もいない。音もない閑散としたエノマキが見られるのは、閉店まで働けない俺達にはこのときだけだ。

「静かだね」

珍しいものでもいるかのように辺りを眺めながら京が呟く。ときおり国道を通る大型車両の音だけが、壁を抜けて僅かに聞こえてくる。

「それじゃあ掃除始めるな。床掃いてから筐体に乗ってる椅子下ろして、この汚い雑巾で筐体を拭けば完了。オッケー？」

「床を履く箒はどちらですか？」

「ああ、箒とか清掃用具類は全部こっちに置いてあるから」

床掃きと筐体拭きの二手にわかれて清掃を始める。

「さすがに三人もいると終わるの早いな」

時計を見ると普段の半分もかかってない。普段は一人ですることだ。

日によって俺だったり、京だったり、叔父さんだったりする。

「ほんじゃ電源入れるな！」

配電盤のスイッチを上げると、閑散だった店内に音が生まれ、光が

生まれる。

「うへえ」

驚かされたように京が間抜けな声を上げる。

「ほんじゃ開店清掃は終了だ。あとはしばらくしたら叔父さん……店長が降りてくるからそれまで待ってようか」

「はい」

「ねえ、せっかくだし少しゲームしようよ」

カウンターに俺が椅子を三つ持ってくると京がイトリの裾を引っ張る。

「大丈夫なんですか？」

イトリが確認するように俺を見る。

「開店は基本、八時からだからたぶん大丈夫……のはず」

基本的にそのへんを叔父さんに直接確認したことはない。ただ、学校行く前にワンプレイなんて今までずっとやってきたことだ。今更駄目だなんて思えない。京の自信のない言葉にイトリは引っ張られる。

「イトリちゃんってどのゲームも出来るの？」

「基本的には全部軽くですけど触ってますので」

「ふうん」

そう言ったイトリの言葉に何か思いついたような含みのある笑みを浮かべて京が俺を見た。あまり良い予感はしない。

「ねえチュータ」

「なんだ？」

「イトリさんも、二人とも私と対戦しない？」

そういって京が指差したのは、俗に落ちものと呼ばれてるパズルゲームだ。更に言えば筐体一つにレバー二つの隣合わせの対戦台だ。

「小さい頃けっこうこれやってたし、これだけは自信あるんだよね」

筐体を前に座った京はレバーをぐるぐると回す。

「別にいいけど、一台対戦(よこならび)かよ」

「別に良いじゃん」

気にする様子もなく京は横長の椅子に座る。

「カモン、カモーン！」

テンションを上げて手招きする京に対してイトリが俺を見た。

「それじゃあ私から」

一歩前に出たイトリは京の横にちょこんと座る。

「よろしくね」

線の細いイトリと京が二人並ぶだけで隙間なんてほとんどない。俺

が座ったらたぶんぎゅうぎゅうになる気がする。

「手加減しないからね！」

「お手柔らかに」

凄む京の言葉を受け流すようにイトリが礼をすると同時に試合が始まる。

「うわー、負けた！」

思いっきり下手糞な京の腕前に俺は力が抜ける。挑んでくるからどんなもんかと思えば瞬殺だ。

「イトリちゃん強ーい！」

「いや、お前が弱いんだろ」

声を上げた京につい言葉が出てしまう。イトリは何事も無かったかのようにどいて片方を空ける。

「どうぞ」

「そんじゃあ……」

俺が空いた方のレバーを握ると京の肩がもろに当たる。

「もうちょっと詰められんねえか？　狭いんだけど」

「私だって狭いんだから我慢してよ！」

子供の頃にレバーを握った手とボタンを押す手がぶつかった記憶があるが、今はそれ以上に狭い。

「その無駄にでかくなった胸どうにかならねえのかよ！」

俺の言葉に京は露骨に不機嫌な表情を浮かべて肩をぶつけてくる。

「勝手に大きくなったんだからしょうがないじゃん！」

自分の胸を確認するかのように京が視線に落とす。

「あ、試合始まるぞ」

「えっ、うそ！」

驚いた京が画面を見ると既に試合が始まってる。俺は慌てる京をよ

そに、淡々とオブジェクトを積んでく。手加減なんて当然しない。

「ちょ、ちょっと待ってよ！」

「だめー」

舌を出して俺はがんがんオブジェクトを積んでく。どんな相手でも手加減しない。それが持論だ。

「あ、ずるい！　そんな大連鎖（こうげき）！」

「ずるいもんかよ。実力だよー！」

全く容赦をしない俺の肩を、京が力の入ってない握り拳でぽんと叩く。

「もう悔しいー！」

負けた京は歯を食いしばるような表情を見せるとそのまま立ち上がってイトリの肩に手をすっと置く。

「イトリちゃん……」

「？」

何を言い出すか全く予想のつかない京を前にイトリは垂れた目をきょとんとさせて首を傾げる。

「私の仇をとって！」

「え、あ」

「お願い～！」

「は、はい！」

京の勢いに押されるかのようにイトリは頷くと四条の隣に座って頭を下げる。

桜色の髪が揺れるたび、嗅いだ経験のない甘い匂いが香ってくる。

思わず頭がぽーっとする。完全に盤外戦術だ。

「それじゃあお願いしますね」

「こっちこそ」

四条も頭をぺこりと下げて画面を睨む。

さっきの京の試合じゃ実力なんてわかんない。ただ、積み方や、落下速度、動かし方だけ見ても上手い気配があった。

「ガチじゃん！」

真剣に画面を睨む四条をからかうように京は両肩に手を置いて後ろから覗き込んでくる。積む速度は若干イトリの方が早い。

「もしかして喋れないくらい余裕ないの？」

「うるせえな」

「あ、マジになってるー」

後ろのガヤが喧(やかま)しい。

「あ！」

まるで予想してなかったいきなりの牽制（ジャブ）は防ぐ術もなく刺さってしまったことに四条は思わぬ声が漏れる。

「あ！」

自然落下に無駄回転。煽りにしか見えないその行動に四条は思わず横のイトリを見る。相変わらずの優しい笑みで満足そうにくるくるとオブジェクトを回転させてる。

「暇な時間ってつい動かしちゃいますよね」

「――――！」

煽りともとれるその操作（ムーブ）と言葉に俺は声も出なくなる。

「負けてんじゃん！」

「う、後ろがうるさいからだよ！」

「めっちゃ濁（にご）ってんじゃん」

にやにやした京の表情が何とも単純な不快感を俺へと与える。

「ほ、ほんじゃ時間あるしもう一回！」

「あ、はい」

イトリの意思なんて確認する前に俺はクレジットを入れる。また試合が始まるが、同じようにイトリの牽制（ジャブ）に対応できずに四条は画面か

ら視線を離して項垂れる。

「全然だめじゃん！」

「強いんだよ！」

なぜか誇らしげな京はイトリの首に手を回して抱きつきながら隣の四条を見てふふんと上機嫌に鼻をならす。

「チュータに比べて、イトリちゃん強い～！」

「もも、もう一回！」

「お前らそろそろ学校に行けよ」



連戦してるといつの間にか店長が俺達の後ろにいた。

「あ、店長！」

俺や京、それにイトリの頭を丸めた雑誌でぽんと叩く。

「もうそんな時間か」

立てかけられた時計を見ると、普段なら登校してる時間だ。

「ほんじゃ対戦はここまでだけど、リベンジさせてもらうから」

「楽しみにしてます」

「ほれ、喋ってないでさっさと学校行け」

「へーい」

気の抜けた返事をして俺は鞄を持つとエノマキを出た。

◆

「おはよう」

教室に着くなりまっさきに挨拶してきたのは鼻頭のそばかすと赤縁眼鏡がチャームポイントだとかのたまってる相楽雪だ。

「夫婦揃って登校ですか。夏もまだなのに熱いことで……」

からかうような雪の言葉を無視して四条は席に着くとなにか不満そ

うに息を吐く。

「何か不機嫌みたいだけどどうしたの？」

「しょうもないことだから」

京は浮かんでくる笑顔を隠しきれないように口元を抑える。

「ちっくしょー……」

さきほどパズルゲームで与えられた敗戦を思い出すたびに四条は口がへの字になってしまう。はっきり言って予想外の強さだった。俺が想像してた実力よりも一つも二つも上だ。

「なんとかして倒せねえかな」

煽られても手も足も出せなかった悔しさから四条は机に突っ伏す。

「おはようございます」

机に突っ伏して嘆くように呟く四条に聞き慣れた優しく囁くような声がかかる。

「――！」

顔を上げて目に入ってきた薄い桜色の長髪に赤いカチューシャは俺に口をあんぐりと開かせた。固まるしかなかった。

「い、イトリちゃん！」

声にならない声を出した俺の代弁をするように京が声を出して寄っ

て来る。

「同学年だったんだ！」

「おまけに同じクラスみたいですね」

「――」

確かに年齢を聞いてなかったが完全に目上だと思い込んでた。それだけに同じクラスにイトリがいることに酷い違和感を覚える。

「これからもよろしくお願いします」

「あ……ああ……」

ぺこりと頭を下げたイトリ相手に俺は気の抜けた返事しか返せな

かった。

敗戦のこともどこかにぶっ飛んでしまうようなことだった。いまだ目の前の光景が信じられない俺に対してイトリはそっと顔を近づける。

「リベンジ楽しみにしてます」

「……はは！」

耳元に口を近づけて喋ったイトリに俺は思わず笑いが漏れた。

教室に響いた笑い声に何事かと周囲が四条を見た。

なんだか楽しくなりそうな、確信にも近い予感だけが俺の胸の中に

あった。

